

ちようと三つの石

小川未明

青空文庫

あるところに、まことにやさしい女おんながありました。女おんなは年としごろになるなると、水車屋すいしやの主人しゆじんと結婚けっこんをしました。

村むらはずれの、小川おがわにかかっている水車すいしやは、朝あさから晩ばんまで、唄うたをうたいながらまわっていました。女おんなも主人しゆじんも、水車すいしやといいつしよに働はたらきました。

「なんでも働はたらいて、この村むらの地主ぢぬしさまのように金持かねもちにならなければだめだ。」と、主人しゆじんは頭あたまを振りながら、妻つまをはげますようにいいました。

妻つまも、そうだと思おもいました。そして、それよりほかのことをば、考かんがえませんでした。春はるになると、緑みどりいろ色の空そらはかすんで見みえま

した。木々きぎには、いろいろの花はなが咲さきました。小鳥ことりは、おもしろそうにこずえにとまつてさえずりました。

夏なつになると、真まつ白しろな雲くもが屋根やねの上うえを流ながれました。女おんなは、ときどき、それらのうつりかわる自然しぜんに対たいして、ぼんやりながめましたが、

「ぐずぐずしていると、じきに日ひが暮くれてしまう。せつせと働はたらかなけりやならん。」

と、そばから主しゅじん人うながに促うながされると、気きづいたように、また、せつせと働はたらきました。

女おんなは、一日いちにち、頭あたまから真まつ白しろに粉こなを浴あびて、働はたらいていました。二人ふたりは、まだ、楽らくな日ひを送おくらないうちに、主しゅじん人は、病びょうき気きにかか

りました。そして、その病びょう気きは、日ひに日ひに、重おもくなるばかりで
した。

医い者しやは、ついに恢かい復ふくの見み込こみがないと、見み放はなしました。その
とき、主しゅ人じんは、この世よを見み捨すててゆかなければならぬのを、な
げきましたばかりでなく、女おんなは、夫おつとに別わかれなければならぬのを、
たいへんに悲かなしみました。

「俺おれは、おまえを残のこして、独ひとりあの世よへゆくのを悲かなしく思おもう。け
れど、もうこうなつてはしかたがない。先さきにあの世よへいつて、お
まえのくるのを待まっているから、おまえは、この世よを幸こう福ふくに暮く
らしてからやつてくるがいい。」
と、主しゅ人じんは、涙なみだながらにいいました。

おんな
女は、泣いて聞いていました、

「どうか、わたしのゆくのを待つていてください。あの世へゆくには、山を上るといいますから、峠のところ、わたしのゆくのを待つていてください。」と、女はいいました。

主人は、安心してうなずきました。そして、ついにこの世から立つてしまったのであります。

女は、泣き悲しみました。しかし、どうすることもできませんでした。その日から、一人となつて働いていました。

水車の音は昔のように、唄をうたつてまわっていましたけれど、女はけつして、昔の日のように幸福でなかつた。

おんな
女は、一人で生活することは困難でありました。それをし

つた村の人は、氣の毒に思いました。

「おまえさんは、まだ若く、美しいのだから、お嫁にゆきなさがりがいい、ゆくならお世話をしてあげます。」と、女に向かつて、しんせつにいつてくれるものもあつた。

女は、夫が死ぬときに、先へいつて待つているという、約束をしたことを思い出すと、そんな気にはなれませんでした。

「死んだ主人に対してすまない。」と、女は答えました。しかし、村の人は、女のいうことをかえつて笑いました。

「人間というものは、死んでしまえば、ろうそくの火の消えたようなものだ。それよりも、生きているうちがたいせつなのだから。」と申しました。

おんな
 女は、そうかと思ひました。急に、心細いような感じがし

て、ついに、お嫁にゆく気になつてしまいました。

おんな
 女は、機織りの家に、二度めに嫁いだのであります。そして、

今度は、一日じゅう機を織つて、夫の仕事を助けました。夫は、

また、妻をかわいがりました。女は、前に水車場の男に嫁いだ

日のことを忘れて、いまの夫を、なによりもたいせつに思うよう

になりました。

おんな
 女は、織物の入つた、大ぶろしきの包みをしよつて、街道

を歩いて、町へ出ることもありません。頭の上の青空は、いつ

になつても変わりがなかつたけれど、また、その空を流れる白い

雲にも変わりがなかつたけれど、女のようにすは変わつていました。

水車場には、知らぬ人が入って住まうようになりました。

「若いうちに、うんと働いて、年をとってから楽な暮らしをした
 いものだ。」と、二番めの夫はいいました。

彼女も、また、そう思いました。

「ほんとうに、そうでございます。」と、女は答えた。

そして、夫婦は、いっしょうけんめいに、家業に精を出した
 のであります。四、五年たちました。

すると、夫が病気にかかりました。病気はだんだんと重く
 なって、医者にみてもらうと、とても助からないということであ
 りました。

夫は、死んでゆく自分の身の上を悲しみました。女は、また、

おつとわか
夫に別れなければならぬのをなげきました。

「私が死んでしまつたら、後でどんなにおまえは困るだろう、しかし正直にさえ働いていれば、この世の中にそう鬼はない、あまり心配しないほうがいい。」と、夫は、悲しみに沈んでい
る妻をなぐさめていいました。

「わたしは、自分のことを思つて、悲しんでるのでありません。あなたにお別れしなければならぬのが悲しいのです。」と、女は
答えました。

「なに、私は、あの世へいって、おまえのくるのを待っている。
おまえは、できるだけ、この世の中を幸福に送つてくるがいい。
。」と、夫はいつた。

「あの世へいくときには、なんでも高い山を上るそうです。どうか、その峠のところで待っていてください。」と、女はいいました。

夫は、うなずいて、なんの心残りもなく、ついにこの世を去ってしまつたのです。

女は、また一人になりました。そして、たよりない日を送らなければならなくなりました。村の人は、この不しあわせの女に同情をしました。

「まだ若いんだから、いいところがあつたら、お嫁にいつたがい、お世話をしてあげます。」と、村の人はいつた。

「そんなことをしては、死んだ夫にすみません。」と、女は涙な

がらに答こたえました。

「すむも、すまないもない。死しんでしまつた人は、消きえたも同じおなじものだ。あの世よなどというものは、まったくないものです。」と、
 村むらの人ひとはいいました。

女おんなは、ほんとうにそうかと思おもいました。そして、人ひとにすすめられるままに、三みたびお嫁よめにゆきました。

三度どめにいつたのは、鳥屋とりやでありました。そこへいつても、彼かの女じよはよく働はたらきました。鳥とりに餌えをやつたり、いろいろ鳥とりの世話せわをしました。月日つきひは早くもたつて、すでに三みたび結婚けっこんをしてから、十年ねんあまりにもなりました。すると、夫おつとはあるとき、病びよう気きにかかりました。彼女かのじよは、よく看護かんごをいたしました。けれど、その

かいもなく、夫おつとの病びょう気きは、だんだん重おもくなるばかりでした。

「おまえを後あとに残のこしていくのは、このうえなく悲かなしい。けれど、これも運うんめい命めいだからしかたがない。おまえは、あの鳥とりのめんどろを見てやったら、どうにか暮くらしていけないことはない。」と、夫おつとはいいました。

「ほんとうに悲かなしいことです。わたしは、もつと鳥とりのめんどろを見てやります。そして、一日いちにちも早はやくあなたのところへゆかれる日ひを待まっています。」と、女おんなは答こたえました。

「それで安あん心しんをした。どうか達たつ者しゃで、幸こう福ふくに日ひを送おくつてくれい。きつと、私わたしは、待まっているから。」と、夫おつとはいいました。

「あの世よへゆくには、高たかい山やまを越こさなければならぬそうです。

どうか峠とうげでわたしを待まっていてください。」と、女おんなはいいました。

男おとこはうなずいて、ついにこの世よから去さってしまいました。女おんなは

夫おつとの亡なくなつてしまつた後のち、よくその家業かぎようを守まもりました。それ

から、また長ながい月日つきひがたちました。女おんなは年としをとりました。そして、

いつか女自身おんなじしんが、墓はかにゆく日ひがきたのであります。

女おんなは、仏ほとけさまに、どうかあの世よへとどこおりなくいけるように

と祈いのりました。そして、ついに目めを閉とじるときがきました。

女おんなは、この世よを去さつたのです。けれど、霊魂たましいは女おんなの念ねんじたよ

うに、あの世よへゆく旅たびに上のぼりました。

女おんなは、長ながい道みちを歩あるきました。うららかに日ひが当あたつて、野のも、

山やまも、かすんで見みえました。夢ゆめの国くにの景色けしきをながめたのでありま

す。女おんなは、やさしいほとけ仏さまに道案内みちあんないをされて、広い野原ひろのはらの中なかをたどり、いよいよ極楽ごくらくの世界せかいが、山やまを一つ越こせば見みえるというところまで達たつしました。

「さあ、もうじきだ、この山やまを越こすのだ。」と、仏さまほとけはいわれ
ました。

女おんなは、青竹あおだけのつえをついて、山やまを上のぼりはじめました。やがて、峠とうげに達たつしますと、そこに三人にんの男おとこが立たって待まっていました。三人にんは、自分じぶんたちの待まっている女おんなが、この一人ひとりの女おんなであるということを知しりませんでした。三人にんは、女おんなを見ると、

「おまえのくるのを待まっていた。」といつて、三方ほうから寄よつてきました。女おんなはびっくりしてしまいました。よく見みると、第一だいの夫おとと

と、第二の夫と、第三の夫であつたのです。

女は、どちらへいつていいか、まったくわからずに途方にくれてしまつた。

「俺は、長い間、どんなにおまえを待たかしのれない。」と、第一の夫がいました。

「私は、いちばん最後におまえと別れたのだ。おまえは私といつしよに、あの世へゆくのがほんとうだ。」と、第三の夫がいました。

「おまえは、私といつしよに、あの世へゆくといつて約束をしたじやないか。」と、第二の夫がいました。

女は、まったく途方にくれてしまいました。

このようすを、ほとけ 仏さまはごらんなされていました。

「おまえは、わるき 悪気のある女おんなではないが、そういつて、三人にんに約やく束そくをしたのはほんとうか。」と、ほとけ 仏さまは、女おんなにたずねられました。

「わたしがわる悪うございます。そういつて、三人にんに約やく束そくをしました。けれど、心こころからうそをいう気きでいったのではございません。

一時じは、あの世よがあることを信しんじました。一時じは、あの世よがあるかどうかを疑うたがいました。」と、女おんなは申しました。

ほとけ 仏さまは、しばらく黙だまって考かんがえていられましたが、

「おまえは、三人にんの中で、いちばんどの人ひとを愛あいしているか？」と、お聞ききになりました。

おんな
 女は、かつて、いちばんどの人を愛しているかを心に考えたこと
 とがないので、返答に困っていました。すると、仏さまは、
 「おまえは、どういふような気持ちで、たびたび結婚をしたの
 か。」と、おたずねになりました。

女は、自分一人じぶんひとりで暮らしてゆけないから結婚けっこんをしたとも、気
 恥はずかしくて申もうされませんでした。

「そんな信仰しんこうのないものは、あの世よへゆくことはできない。お
 まえは、ちようになつて、もう一度どげかい下界かえへ歸つて、よく考かんがえてく
 るがいい。そして、ほんとうにまどわなない悟さとりがついたら、その
 とき、あの世よへやつてやる。」と、仏ほとけさまは女おんなに申もうされました。
 また、仏ほとけさまは、三人にんの男おとこに向むかつて、

「女おんながほんとうに悟さとりがついて、永えい久きゆうに変わからない自分じぶんの夫おつとを見み分けわがつくまで、ここに待まっているがいい。」といわれました。

やがて、女おんなの姿すがたは、ちようとなりました。そして、夕日ゆうひの空そらに向むかつて、どこへとなく飛とんでゆきました。

三人にんは、峠とうげで、十年ねん、百年ねん、幾いく百年ねんと待まちました。そのうちに、三人にんは、三つの石いしになつてしまいました。けれど、下界げかいに去さつたちようは、いまだに悟さとりがつかないとみえて、花はなから花はなへと、美うつくしい姿すがたをして飛とびまわつていて、帰かえつてこないのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「婦人倶楽部」

1921（大正10）年5月

※表題は底本では、「ちようと三つの石《いし》」となっています。

※初出時の表題は「蝶と三つの石」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：富田倫生

2012年5月23日作成

2012年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ちようと三つの石

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>